

## 西穂独標で逝った11人の仲間

大西健文

西穂独標へ登ったのは、これが2回目。1回目は32年前。私が26歳の時だった。新聞記者（信濃毎日新聞）になって、それまで登らなかった西穂独標に「仕事」として登った。8月1日に照準を合わせ、31日に西穂山荘、1日に独標で慰霊登山に来ているはずであろう「誰か」を待った。

西穂山荘では山荘のおやじ村上守さん（いまの山荘経営者は村上さんの孫の文俊さん）に取材した。西穂を知り尽くしているおやじは、私が知らなかった多くのことを語ってくれた。

その翌日、私は独標で写真を撮るために「追悼する人」を待った。私が独標に着いたときには、誰が供えたのか、花が置かれていた。そうこうしているうちに会ったのが、毎年、慰霊登山を欠かさない小林俊樹さんだった。当然ながら小林先生も私もまだ若かったころだ。

私は上高地に下りて、32年前の「追悼」を記事にして本社に送ったが、なかなか書けなかった記憶がある。亡くなった仲間たちのことを思うと、記事を書くことが何を意味するのか。自分自身は何なのか。山荘のおやじの「証言」も重く、その夜はただただ飲み明かした。

\*\*\*\*\*

事故から40年後の2年前にも登る予定だったが、母に続き父を亡くした直後で、精神的にも肉体的にも余裕がなく、母校での慰霊祭に参加して記事を書いた。あの落雷事故に触れる記事を書くことは、重くつらいものがあったが、11人の仲間であり、記者という仕事を選んだ自分の責任でもあったと思った。

卒業40年の節目に、今回の慰霊登山を計画してくれた鈴岡さんらには、深く感謝している。登るなら上高地からと決めていたが、若い時とは違い足が動かず、息が切れ、皆さんには迷惑をかけた。

独標では、落雷に遭いけがをした2人から当時の状況を聞いた。生と死を分けた一瞬。現場検証しながら、初めて聞く証言は衝撃的だった。事故によって深い心の傷を負った遺族や引率の先生、そして一緒に登った同期生たち。悪夢のようだった8月1日を忘れられずに生きてきたつらさは、現場にいなかった私とは大きな開きがあることも、あらためて感じた。

「また登ろう」。60歳の定年が迫った「極楽とんぼ」たち。足腰が元気なうちは、また独標を訪ねたいという思いを胸に、ずぶぬれになりながら上高地を後にした。8月1日は自分自身の「生」を見つめる日でもある。

